

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 7 日現在

機関番号：32670
研究種目：基盤研究(B) (一般)
研究期間：2013～2016
課題番号：25285158
研究課題名(和文) 日本人のパーソナル・ネットワークの変化を捉える

研究課題名(英文) Changes in Personal Network of Japanese

研究代表者

石黒 格 (Ishiguro, Itaru)

日本女子大学・人間社会学部・准教授

研究者番号：90333707

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 10,600,000円

研究成果の概要(和文)： ICTの普及などを受けて、日本人の社会関係は大きく変化したと言われる。また社会的格差の拡大などもあって、日本人の孤立化傾向が高まっているという主張もある。しかし、日本人の社会関係の変化について、実証的に明らかとした知見は存在しない。

本研究課題では、このような状況を鑑み、1993年に行われた「都市生活と家族に関する意識調査」を再実行し、過去20年間に生じた社会関係の変化を検討した。明らかになったのは、隣人、親族、同僚などを近距離に持つ人々が少なくなったこと、夫婦関係に関する意識が平等方向に変化したことなどが明らかになったが、全体として変化は小さく、人々は同程度のサポートを得ていることだった。

研究成果の概要(英文)： It is widely believed that social relationships of Japanese people have changed during past several decades. Some journalistic and academic reports claim that Japanese people have become to be isolated. However we cannot empirically examine these claims because we have few empirical data to do so.

In 2014, we re-conducted "Survey of attitudes toward urban life and family" which is originally conducted in 1993. Merging the two data, we examine changes in Japanese people's social relationships. The findings are as follows. 1) Japanese married people have the fewer intimate alters (neighbors, colleagues, and relatives) in their neighborhood. 2) Attitudes toward family issues slightly changed. 3) Changes are small and Japanese married people have the same amount of social support resources as the people of 20 years ago.

研究分野：社会心理学

キーワード：パーソナル・ネットワーク 時系列調査 ソーシャル・サポート 社会的孤立

1. 研究開始当初の背景

ICTの普及や経済的变化などを背景に、日本人の社会関係が変化したことが予測されていた。また、社会的にはジャーナリズムでも、アカデミックにも、人々の社会的孤立が危惧されていた。しかし、こうした事実を実証的に明らかにする足るデータは、ほとんど存在しなかった。

一方で、1980年代の終わりから、都市社会学者が、主として都市度という生態学的変数が人々の社会関係に及ぼす効果に注目し、多くの調査研究を行っていた。これらの成果と、現代における調査研究の成果を結合すれば、社会関係の変化について、実証的な検討を行う可能性があった。

2. 研究の目的

本研究は、こうした状況を鑑み、社会関係に関する時系列データを作成し、社会関係の変化を検討することだった。調査データを過去に遡って作成することはできないため、データセットが公開されている調査を忠実に再現して再実行し、データセットを結合して社会関係の変化を検討することとした。特に、社会関係の直接的なツールであるICTが普及したことのインパクトを想定し、普及以前に実施されたパーソナル・ネットワーク調査を再現することを目的とした。

また、本研究においては、ネットワーク・サイズの分析に分位点回帰分析を用いる、ネーム・ジェネレーターで測定したダイアドの分析にマルチレベル分析を用いるなど、過去20年間の技術的な進歩を取り入れた。これにより、過去に行われた社会関係に関わる知見を、統計学的により現代かつ妥当な方法で再検証することを目指した。

具体的な研究のターゲットは、利用可能なデータセットによって制約されていたが、現代における社会的孤立に対する関心の高まりや研究分担者の専門性も考慮し、サポート・ネットワークのサイズ、サポートの授受、親密な友人関係の地理的範囲と接触頻度、親密な友人関係における同類結合、そして家族に関する意識とした。

3. 研究の方法

1993年にニッセイ基礎研究所が1993年に実施した「都市生活と家族に関する意識調査」を再現した。調査対象者と方法は以下の通りであるが、方法論的な変化が結果に影響することがないように、調査時期までも含めて、可能な限り、オリジナルの調査と同一の方法をとった。

- ・地域
山形県山形市・埼玉県朝霞市
- ・対象者
満20歳から65歳の既婚の男性とその妻
- ・標本数
山形市 800組
朝霞市 800組

- ・抽出方法
層化2段無作為抽出法
- ・調査方法
調査員による個別訪問留置法
- ・調査時期
2014年6月19日～2014年7月13日
- ・有効回収数(率)
山形市夫 390 (48.8%) 妻 406 (50.8%)
朝霞市夫 354 (44.3%) 妻 376 (47.0%)
- ・調査委託先
新情報センター

オリジナル調査のデータセットは、立教大学データアーカイブ(RUDA)において公開されており、許諾を得て二次分析した。

4. 研究成果

主たる研究成果は、以下の通りである。なお、対象者が有配偶者に限定されるため、ここでの研究知見の適用範囲も、有配偶者に限定される。

- ・有配偶者の社会関係は量的には縮小したが、その幅は小さい。
- ・社会的孤立は男性でわずかに増加した。
- ・減少が大きかったのは、男性の近隣での同僚、親族関係と女性の隣人関係である。
- ・増加したのは、女性の近隣での友人関係である。
- ・若年男性は、友人数が多いものと、いないものとの二極化が生じている。
- ・ネットワーク・サイズの変化は、分布の右側でより大きい。
- ・親密な友人関係は、地理的に拡散し、かつ援助的な関係から娯楽的な関係に変化した。この変化は男性で顕著である。
- ・親密な友人との関係が、同類結合となる傾向が強くなった。
- ・家意識は支持が減少した。
- ・性別役割意識は、女性に対するものは支持されなくなったが、男性に対するものは大きな変化はない。
- ・直系核親族、職場、友人というサポート源からのサポート量が増加した。
- ・隣人、親族からのサポートが減少した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 9 件)

1. Ishiguro, I. (2016). Extroversion and neuroticism affect the right side of the distribution of network size. *Social Networks*, 44, 219-225. doi: <http://dx.doi.org/10.1016/j.socnet.2015.10.004>
(査読あり)

2. 三田泰雅 (2015) 朝霞市・山形市における家族意識の変化 四日市大学総合政策学部論集, 14, 21-37.
(査読なし)
 3. 石黒格 (2014). ネットワーク・サイズに対する都市度効果再考: 朝霞 - 山形調査データへの分位点回帰分析の適用 日本女子大学大学院人間社会研究科紀要, 20, 113-127.
(査読なし)
 4. Nozawa, S., (2014). Marital relations and personal communities in urban Japanese settings: Structural effect and cultural context. 社会学・社会福祉学研究, 143, 51-74.
(査読なし)
 5. 赤枝尚樹・前田忠彦 (2014). 都市度尺度としての人口ポテンシャルに関する再検討 関西大学社会学部紀要, 45, 249-265.
(査読なし)
 6. 野沢慎司・菊地真理 (2014). 若年成人継子が語る継親子関係の多様性: ステップファミリーにおける継父の役割と継子の適応 研究所年報(明治学院大学社会学部附属研究所), 44, 69-87.
(査読なし)
 7. Kobayashi, T. & Boase, J. (2014). Tele-Cocooning: Mobile Texting and Social Scope. Journal of Computer-Mediated Communication, 19, 681-694.
(査読あり)
 8. 針原素子 (2014). ソーシャルメディアの利用に及ぼす自己と周囲の文化的価値観の影響 論集(東京女子大学紀要), 64, 219-238.
(査読なし)
 9. 石黒格. (2013). 社会心理学データに対する分位点回帰分析の適用: ネットワーク・サイズを例として. 社会心理学研究, 29(1), 11-20.
(査読あり)
- [学会発表](計 14 件)
1. 石黒格 20年間の親密な友人関係における接触頻度の変化 日本数理社会学会 2016.3.17 上智大学 東京都
 2. 石黒格 社会関係は「解放」されたか 日本社会心理学会 2015.11.1 東京女子大学 東京都
 3. 石黒格 1993-2014年間の日本人のネットワーク・サイズの変化 日本グループ・ダイナミクス学会 2015.10.11 奈良大学 奈良県
 4. 石黒格 日本人の社会関係はどう変わったか 名古屋社会心理学研究会 2014.12.13 名古屋大学 愛知県
 5. 石黒格 1997~2005年間のパーソナル・ネットワークの変化 日本グループ・ダイナミクス学会 2014.9.7 東洋大学 東京都
 6. 石黒格 カウント分位点回帰分析を用いた都市度効果の再考 日本社会心理学会 2014.7.26 北海道大学 北海道
 7. Kobayashi, T. & Ichifuji, Y. Tweets that matter: Evidence from a randomized experiment in Japan. Southern Political Science Association. 2014.1.11, The Hyatt Regency New Orleans, New Orleans, U.S.
 8. Harihara, M. Cultural differences in social network. The Society for Personality and Psychology. 2014.2.15, The Austin Convention Center, Austin, U.S.
 9. 野沢慎司・菊地真理 継親子関係の多様性と世帯内外の家族・親族関係: ステップファミリーの子どもたちへのインタビュー 日本家族社会学会 2013.9.7, 静岡大学 静岡県
 10. 菊地真理・野沢慎司 ステップファミリーの子どもたち調査(1): 継親の役割行動と継子の家族境界 日本社会学会 2013.10.12 慶應義塾大学三田キャンパス 東京都
 11. 野沢慎司・菊地真理 ステップファミリーの子どもたち調査(2): 重要な家族移行経験とライフコース 日本社会学会 2013.10.12 慶應義塾大学三田キャンパス 東京都
 12. Nozawa, S. & Kikuchi, M. Five Patterns of stepchild-stepparent of stepchild stepparent relationship development in Japan: Young adult stepchildren's view. Sociological Association of Aotearoa New Zealand. 2013.12.9, University of Auckland, Auckland, New Zealand.
 13. Kikuchi, M. & Nozawa, S. Do relationships with non-custodial

parents matter in accepting stepparents? Japan's young adult stepchildren's view. Sociological Association of Aotearoa New Zealand. 2013.12.10, University of Auckland, Auckland, New Zealand.

14. 三田泰雅・和秀俊・西村昌紀・遠藤伸太郎 高年男性の娯楽と社会参加 老年社会学会 2013.6.5 大阪国際会議場, 大阪府

〔図書〕(計 1 件)

1. 赤枝尚樹 (2015). 現代日本における都市メカニズム: 都市の計量社会学 ミネルヴァ書房

6. 研究組織

(1) 研究代表者

石黒 格 (ISHIGURO, Itaru)
日本女子大学・人間社会学部・准教授
研究者番号: 90333707

(2) 研究分担者

三田 泰雅 (MITA, Yasumasa)
四日市大学・総合政策学部・講師
研究者番号: 30582431

野沢 慎司 (NOZAWA, Shinji)
明治学院大学・社会学部・教授
研究者番号: 40218318

針原 素子 (HARIHARA, Motoko)
東京女子大学・現代教養学部・講師
研究者番号: 80615667

(3) 連携研究者

赤枝 尚樹 (AKAEDA, Naoki)
関西大学・社会学部・講師
研究者番号: 50645546

(4) 研究協力者

小林 哲郎 (KOBAYASHI, Tetsuro)
国立情報学研究所・准教授
研究者番号: 60455194